

職員が聞いた つぶやき

わたしたちが地域のいろいろな方のお話を聞かせていただく中で、聞こえてきた「つぶやき」をご紹介します。「つぶやき」は、どうにかしたい、こうなったらいいなどの想いの現れ。地域をよくしていくための芽のようなものと思います。簡単に変えていけるものではないけれど、少しでも皆さんの幸せにつながる方法はないか、わたしたちも一緒に考えさせていただきたいと思っています。

人が少なくなった。特に若い人や子ども。仕事があれば人が増えるんじゃないかな。

サルの被害が多くて困る。農作物を作っても作っても食べられてしまう。

若い人たちに結婚相手を探してあげたいなあ。

近所の人とも話す機会が減った。助け合いがしにくくなった気がする。

車がないと、移動がすごく大変。買い物や通院も一苦労。

あなたの
お力貸して
ください！

このかわら版は、皆さんからお聞きした情報をもとに作っています。旭にこんな素晴らしいものがある、がんばっている人がいる、きれいな景色があるなど、情報がございましたら、ぜひお寄せください。

また、かわら版の作成に協力してくださる方も大歓迎です。そのほか、地域をよくしていくためのアイデアやご提案をお持ちの方もどうぞご連絡ください。

連絡先：協働のまちづくり推進課（担当 大河原）

TEL0229-63-3215 FAX0229-63-2037

編集後記

わたしたちは、役場「協働のまちづくり推進課」の職員です。この聞きなれない長い名前の課を説明するとき、「今も素晴らしいこの地域をさらにより地域にするために、住民の皆さんと一緒にがんばらせていただく課です。」と説明します。でも、実際どうやって？わたしたちも悩みました。悩んだ結果、皆さんにたくさん話を聞いて、地域を教えていただくところから始めようという結論になりました。話を聞いてみると、皆さんそれぞれに素晴らしい才能を発揮されていて、地域を愛しながら暮らしていらっしゃるのがわかりました。そして将来にいくつか悩みを抱えていらっしゃることも。かわら版には、聞き取りをもとに地区の素晴らしいヒト・モノ・コトの資源と、皆さんのつぶやきを掲載しました。もっとよい地域に、もっと幸せな暮らしを。それを実現するには、行政だけではできないし、地区の皆さんだけでも難しい面があるかもしれません。今回掲載したような素晴らしい地域資源をヒントに、皆さんとひざをつきあわせてじっくりゆっくり、一緒に考えさせていただきたいです。どうぞこれからもよろしくお願いたします。

ヤクバ職員が見て、聞いて、教わった旭。

旭かわら版 創刊号

発行：加美町協働のまちづくり推進課

発行日：平成28年12月27日

連絡先：〒981-4292

加美町字西田三番5番地

TEL：0229-63-3215

FAX：0229-63-2037

E-mail：kyodomatidukuri

@town.kami.miyagi.jp



二ツ石ダムの紅葉

10月26日、まだ少し早い二ツ石ダムの紅葉を見てきました。抜けるように青い空。水面に色づきはじめた紅葉が映え、とても美しい光景でした。

「これで3割くらいかな。」
まだまだこんなもんじゃないよ、と案内人の庄司さんが笑いながら教えてくださいました。

そのあと行った田代キャンプ場も、開放感のある気持ちのよい空間。カラマツが黄金色に輝いていました。田代にUFOが着陸したという都市伝説があるけれど、宇宙人もこの心地よさに惹かれたのかもしれない。

旭の魅力はなんといってもこの美しい自然でしょう。四季折々に目を楽しませてくれるだけでなく、山菜やキノコなどの山の恵みももたらし、「長くて質が良い」と有名な寒風沢の炭もこの自然があってこそです。

しかし、美しい自然は厳しい表情も併せ持っています。わたしたちは、北永志田と寒風沢のミニデイに参加させていただき、おじいさんおばあさんに、

子どもの頃のお話を聞かせていただきました。何もかも覆い尽くす雪と、道路状況の悪さ。そんな中でも子どもたちは、馬の背のような雪道を、ストーブの焚き付けにする杉っばをしょって徒歩で通ったり、わらを敷いた長ぐつを裸足で履いて竹スキーを楽しんだり、たくましく育っていました。その歴史があって、今がある。そうしみじみ感じたのでした。



田代キャンプ場

北永志田 ミニデイ



竹スキー



ぼった

11月19日(土) ゆ〜らんどで北永志田のミニデイが行われました。わたしたちも参加させていただき、13名の皆さんに子どもの頃の遊びについてお話を伺いました。

皆さんの口から出た懐かしい遊びの数々。たまごぶち、パッタ、川遊び、手作りの竹スキー・そりあそび、紙風船、まりつき、あやとり、カルタ…。遊びではないですが、「万金丹(まんきんたん)」という万病に効く万能薬があったのだそう。「鼻くそ丸めて万金丹」という歌もあったとか。面白いですね♪参加者の皆さんからは、「懐かしい」「こういう話をするのは良いね」との声が聞かれました。

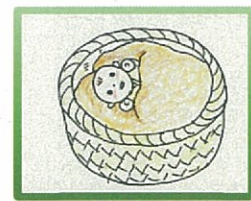
昔話のあとには、ミニデイ定番のカラオケが行われましたが、皆さんとてもお上手!それもそのはず、北永志田には、区長さんをはじめたくさんの「歌うま名人」がいるそうです。

ほかにも地区の名人がいるか伺ったところ、「漬物名人」もたくさんいるとのこと。もちろん今回参加されていた中にもいらっしゃいましたよ。「味噌漬けや梅干し漬けなど何でもつけられるのよ」と話してくださいました。

笑顔いっぱいのにぎやかな雰囲気、私たちも楽しく参加させていただきました。北永志田の皆さん、ありがとうございました。



北永志田ミニデイのようす



えんつこ

寒風沢ミニデイ



俵編み

11月26日(土)にはゆ〜らんどで行われた寒風沢のミニデイに参加。参加者9名の皆さんに、寒風沢の昔のよもやま話をお聞きしました。

まずは、農業にまつわる道具や作業の話で共感の輪ができました。一番盛り上がったのは、「水車(ぼっかり・がったり)」の話です。昔は3~4軒に1つはあったそうで、「二ツ石畑にあった。」「区長さんの家の近くにあった。」など、持参した地図にも印をつけながら、話に花が咲きました。収穫したお米からもみ殻を取り除くための道具「土摺臼(どずるす)」についても、詳しくお話を聞くことができました。

「俵編み(たらあみ)」の話もありました。俵編みは、米俵をわらで作る作業のことです。俵編みの思い出を伺ったところ、「とても神経を使い、指先が痛くなるほどだった。13枚作るのが精一杯だった」と話してくださいました。

また、生活に関連したことで、「柳行李(やなぎごうり)」「えんつこ」など、現在ではすっかり見なくなった身の回り品の話も出ました。

寒風沢の産業にも話が及びました。ひとつは、「漬物加工組合」の繁盛記です。漬物加工組合は、かつて地域で25年間やっていたそうです。山菜ミックスが好評で、仙台など各地の物産展でも販売していたとのことでした。有名な「寒風沢の炭」もやはり話題にのぼりました。寒風沢の炭は長くて質の良い炭で、地域の人ほとんど炭焼きをしていたそうです。区長さんは今でも炭焼きをしていて、最近新しい窯を作ったらしい…というお話聞きました。気になりますね◎さらに「ナメコ栽培」や「新鮮クラブ」など地元の産業や、「塩湯温泉」という秘湯の話までありました。

寒風沢の皆さん、ありがとうございました。

うつわとひとのものがたり



切込焼は、江戸時代の後期から明治時代の初め頃まで、切込地区で生産されていた陶磁器です。その貴重な切込焼が守られている切込焼記念館は、地域活性化の拠点として平成2年4月にオープン。現在、「うつわとひとのほんのりひとはだものがたり」の企画展を開催しています。今回の企画展では、切込焼を守ってきた「ひと」と、その思いに迫ります。

まずわたしたちの心をとらえたのは、人から人へ思いが受け継がれ、大事に守られてきた「恵比寿像・大黒天像」でした。この切込焼は、商売繁盛の神として、長い間、家の神棚に祀られていたそうです。寄贈者である鈴木幸子さんが、お義父さんから受け継いだもので、記念館を信頼して預けることに決めたそう。長い間親しまれている記念館で、その思いが受け継がれているのは素晴らしいことですね。



また、その当時の暮らしの匂いが残る「染付蛸唐草文火鉢」も素敵でした。火鉢の中には灰が残っており、底に紙を敷いて使用していたそうです。縁に描かれている小花模様が可愛らしく、優しい温もりを添えています。火鉢がばちばちとはぜる音や、火鉢を囲んだ人たちの会話がかすかに聞こえてきそうですね。

この企画展は、平成29年3月26日まで開催中です。ぜひこの機会にご家族、ご友人とお誘いあわせの上、観覧してみたいかがでしょうか。うつわに関わった「ひと」とその思いが感じられ、心がほっとあたたかくなりますよ。

加美町ふるさと陶芸館(切込焼記念館)
加美町宮崎字切込3 0229-69-5751 10:00~16:30
休館日は、第2・第4月曜日 年末年始12/28~1/4
大人300円 シルバー200円 高校生・大学生200円

ファッション 今昔

これが「ふごみ」



こっちは「もんぺ」



寒風沢のミニデイでお会いした早坂さんが、昔の服を見せていただくことを快く約束してくださいました。後日お宅に伺いました。

まず見せていただいたのは、ミニデイでも話題になった「ふごみ」と「もんぺ」です。恥ずかしながらわたしたちが知らなかった「ふごみ」は、少しゆったりしていて、すそがすぼまっています。見せていただいた「ふごみ」はお父様がお婿さんにくるときに持参されたものだそう。対して「もんぺ」は、より細いシルエット。両方とも、股下に「笹」とよばれるマチが入っていますが、「ふごみ」と「もんぺ」で笹の入り方が違います。これがシルエットの違いに反映するんですね。

作業のときは、「もんぺ」よりさらに細い「はかまっこ」を着用していました。上には「はだっこ」という、かすりのはんてんを着て、手には

「てっか(手甲)」をしていたそうです。上半身は茶摘み女のイメージでしょうか。ほんの数十年前のことなのに、今の服装とは全く違いますね。

早坂さんのお宅では、昔蚕を飼っていたそうで、自家製の生糸で機織りもしていたそうです。早坂さんがおばあさんに教わって初めて機を織ったのは18歳のとき。その後、家で蚕を飼うのをやめるまで2~3年の間は機織りをしていたそうです。織った布は、小野田の斉藤染屋さんに持って行って染めてもらいました。今でも早坂さんのお宅には、機織り機があるそうです。

早坂さん、貴重なお話ありがとうございました。



早坂さんが初めて織った着物